

石狩川右岸のメム(上)

前回までは、松浦武四郎の記録を中心に、石狩川左岸のポロメムとポソムムについて記述したが、今回は第二十二回で紹介した右岸のポロメムとポソムムについて述べる。

掲載図は、明治三十一年製版の北海道仮製五万分一図である。この地図は、アイヌ語地名研究には必携の地図で、河川名は基本的にはアイヌ語名で書かれている。理解しやすいように、現在の旭橋の位置を図に示した。旭橋以北の太い道路は現在の国道40号線とほぼ同じと理解していただいてよい。ポロメムは現在の国道40号線に沿って流れていて、ポソムムは国道に平行する形で流れていた。大正五年測図の二万五千分一地形図で、ポソムムの源流をたどる

と、現在の護国神社、および、スタルヒン球場と石狩川の中間を通り、花咲スポーツ公園の球場と陸上競技場の間を抜けて、花咲町四丁目、石狩川に繋がっていた石狩川の分流だったように思われる。

アイヌ語地名では、同じような川や沼等が並んでいる場合に、大きい方ポロ(poro) 親または大、小さい

い方にポソ(poso) 子または少を付けて呼ぶ事が多い。明治三十三年測定の第七師団司令部の上川地方迅速測図では、ポロメムの方が流路延長が長いので、ポロメムとなったのかも知れない。ただし、幹線道路沿いのためか、早くから水量が少なく

なったようである。ポソメムの方多く、水川の名で旭川市管理の普通河川であったが、現在は普通河川から除かれている。ポロメムは川端(かわがは)の名称で、新橋下流の川端樋門、ポソメムの水川は、旭橋下流の本町樋管で石狩川に流されている。

さて、掲載図は、陸地測量部(現在の国土地理院の前身)発行の公的な地図である。そこに記載されたポロメム・ポソメムであるが、明治二十三年に調査した永田方正は、本連載の二十三回に既述のように、左岸のポロメム・ポソメムの地名解はしたが、右岸のこのポロメム・ポ

ソムムには触れていない。また、知里真志保も、この地図を活用しているのは明らかでありながら、永田方正同様に、右岸のこのポロメム・ポソムムの地名解をしていない。

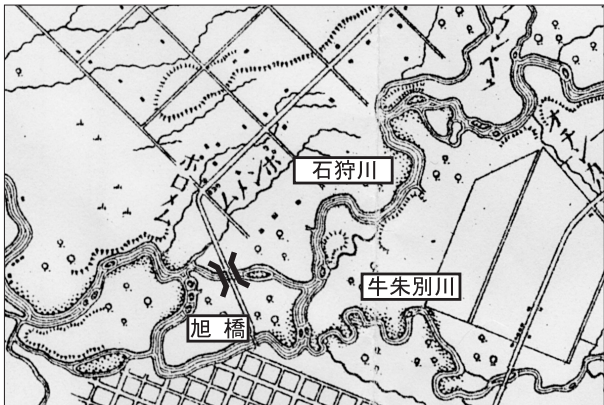
永田方正も知里真志保もそれぞれの時代の最高のインフォーマントからの情報で地名解をしていながら、右岸のこのポロメム・ポソムムについて記録していないのは、この地図のポロメム・ポソメムが誤っている可能性がある。現に、文化四年(一八〇七年)、近藤重蔵が乗った丸木舟が転覆破船し、百間(約百八十呎)ほど流され、御朱印まで濡らしたエピソードで有名な、神居古潭のレーコロプイラの位置が誤って記されている事例がある(「カムイコタン」の項で後日詳述)。

あるいは、常識的には、この時代の情報提供者が、この二つの川をポロメム・ポソメムと認識していた可能性もある。その意味からも、今回は掲載図より古い時代の地図で、石狩川右岸のメムの考察をしたい。

アイヌ語地名研究会幹事

断章 旭川のアイヌ語地名研究

28 高橋基



※毎月第一週号に掲載します